



7月の隣人



田中彼方

春の心地よい風はどこへやら、ジメジメとした季節がやってきて、蒸される体全体から汗が吹き出る。

こんな季節の外回り営業は心配りが重要である。汗が染み渡ったワイシャツを訪問先近くの喫茶店のトイレで着替え、制汗スプレーを適度に体に振り掛ける。こういう小さな努力を積み重ね、俺は見るからに暑苦しい汗かきのイメージを払拭し、営業先では、いつも涼しげに登場する爽やかマンとして好印象を持たれている。その結果、若手の中ではトップクラスの業績を上げ、社内の有望株として将来を期待されている。

とはいっても、カラッとしない夏は嫌いだ。早く帰りたいと思っていたところに、上司から天の声がかかった。

「川野くん、今日はもう上がりたまえ」

先日、日曜出勤したときの代休だそうだ。久々に早番になった今日は、まだ13時だが早々に退社し、自宅で冷房をガンガンに効かせながら、ビンビンに冷えたビールを飲むために、いつもより足早にビジネス街を通り過ぎる。

しかし、都会の信号には逆らえない。赤は止まれ。はい、わかりました、忠実に従います信号機様。酒を飲んで酔っ払った上司のような背の高い赤と青緑の2色のランプがついた棒が立ちはだかった。ポケットからハンカチを取り出し、額から右頬にかけて汗を拭きにかかる。ハンカチが額から滑り落ち、右頬に差し掛かった瞬間、心と右目の視界に入ってくる茶色の立方体。帰る以外にとりわけ予定もないし、俺は興味本位で近づいてみた。

路地裏の片隅、ポツンと置かれたダンボールの中で、子猫が2匹じゃれあっている。たぶん双子なのだろう、白を基調とした毛並みに、茶色の模様が同じような部位に点々と混じっている。まだ捨てられて数時間も経っていないのか、ひもじさは微塵も感じられず、痩せこけていない中肉の体には十分愛らしさがある。まんまるで黒々とした瞳は潤いを保ちながら輝いていて、そこに「捨てられた」という自覚は毛頭ない。

俺は2匹を両腕で抱き上げ、その向こうが透けてしまうくらいマジマジと見つめる。やはり、子猫の目には「死」という危機感がない。このまま、助けが来なかったとすれば、この子達はあと何度の夜明けを迎えられるのだろうか……。蝉の命は約一週間というが、おそらくこいつらの後先はそれよりも短いものに違いない。

「こんなカワイそうな、子猫に救いの手を」

と、誰かに相談したところで、お前が飼えばいいじゃないか、と一蹴されてしまうのは目に見えている。それはそうだ、子猫をカワイそうだと思うのは他でもない自分なのだから、自分で何とかしなければいけない。そもそも、俺と同じ感情を他の奴が持っているなら、粗大ゴミのように捨てたりはしない。もし仕方なく捨てるとしても、海の見える丘とか、富良野のラベンダー畑とか、空気のおいしい屋久島の杉の根元とか、最後にふさわしい場所を選定してやる。もっとも猫にとって最高の場所はカツオの競りが行われる魚市場かもしれないが……。

それにしても、周りのやつは、俺のことが見えているのか。俺はさっきから、空気のように素通りされている。三十を目前に控えた、いっぴしのサラリーマンが真っ昼間に猫と遊んでいる光景なんて滑稽で、ついつい視線をやりたくなる、にもかかわらずだ。忙しさの中に捕らわれて、少しの滑稽も感じるできない奴ばかりなんて、世の中も冷たいものだ。7月に入り、気温はどんどん上昇しているというのに、心は寒い、芯まで冷え切っている。温かいスープが必要だ

「よし、今晚はコンソメスープだな」

「ミィ〜ミィ〜」

2匹がコンソメという言葉に反応して、俺の方に興味を示した。

「なんだ、お前たちも飲みたいのか」

「よし、うちに来い。今日からお前らは家族だ」

こうして、俺は2匹の子猫を連れて帰った。友人に名前を尋ねられたとき、名前はまだない、などとコミカルなやりとりをするのは恥ずかしい。とりあえず名前を考えよう。安易に「コンソメ」でどうだろうという案も立てたが、人間様でないとはいえ、捨て猫にも敬意を払うべきである。よく考えてやらなくてはなるまい。

—————決めたっ、お前は「ジュライ」、そしてお前はやっぱり「コンソメ」。

名前を考える、というミッションは俺には酷だった。ペットの名前といえば、太郎、花子、カタカナでいくと、ポチまでしか浮かんでこない。ジュライは今日が7月だから、コンソメはスープを作るから。適当にも程がある理由付けだが響きは悪くない。2匹の猫には、主の良いのか悪いのか判断に困るネーミングセンスにより名前が授けられた。

とりあえず、俺の家族が増えた。主は名前の由来うんぬんは忘れて、そう結論を出した。そして、おいしいコンソメスープを作るべく再び街に繰り出した。

ぽつりぽつりと不安定な曇天の空から雨粒が落ちてきた。

「マジかよっ、」

降水確率80%の中、残り20%を信じて傘を携帯しなかった主の嘆きである。

運の良いことに、雨を防ぐことのできそうな屋根のある店が目の先に見える。蜘蛛の糸にすがる気持ちで、屋根の下に駆け込む。と、同時に雨の強さが増す。

「ひゃあ、すごいな」

砂漠に降ったら一瞬でオアシスができるのではないかと思うほど、滝のような雨粒のラインが無数に描かれている。これほどの雨はそんなにお目にかかることはできない、自分が子どもだったら真っ先に雨に打たれるだろうな、と、少しノスタルジックな気持ちになったが、片手にスーパーのレジ袋を持っていたはそんな気持ちも憂鬱に変わりゆく。

5分ほど経ったか、一向に雨は弱まる気配がない。

————ピチャッ、ピチャッ。

おっ、同士が現れた。この雨から逃げてきた人間はみんな仲間さ。同じ屋根の下でしばしの時間を共に過ごそうではないか。俺は、自分勝手な一体感を相手とも共有して、雨の憂鬱を振り払おうと考えた。だが結局、一度も相手の方を見ず、話しかけもしないことにした。ずぶぬれになった自分の無様な姿を、わざわざさらしに来る奴はいない。きっとこの人も見られたくないはずだ。それに、今、この屋根の下は誰にも侵されぬ安全地帯だ。俺が人様の心のセーフティーゾーンに踏み入ってしまったのはだめだ。

自分なりの善意で、俺は無言のまま、さらに5分待った。

少しだけ勢いが弱まってきた。これならば、なんとか傘がなくても帰れるぞ。まさか、こんな所でめっぽう速い足が役に立つなんてな。軽く手首足首を慣らして、スタートの準備に入る。よーい、どんっと全力で駆け出そうとしたときだった。

「よろしければ入ります？」

つかの間の隣人との沈黙が破られ、ついに声のする方を見てしまった。

————。俺は思わず息を呑み、返答できずにその場に立ち尽くした。

ま、まずい、きれい過ぎる。時たま、美術館に飾られた絵画に言葉を失うくらいの感動を覚えることがあるが、これはそれに似ている。フェルメールの描く世界に包まれたかのような錯覚が起こり、抜け出すことができない。

「あの、傘もってないですよ？」

彼女が恐る恐る俺に聞き返す声で我に返る。どうやら、美女はあの雨で傘がさせなくなって雨宿りしに来たらしい。

「あ、結構ですよ。家すぐそこなんで」

俺は動揺する心を悟られぬよう平静を装って言った。ありがとう、とか感謝の気持ちを表す余裕はない。

「じゃあ、これで」

素っ気なくその場を立ち去ろうとしたそのときだった。

「ミィ〜、ミィ〜」

「ジュライッ、コンソメッ！！」

窓も入り口も施錠してきたのに、なぜこいつらがここに……。

「コンソメっていうんですか、この猫」

二匹とも、雨に濡れた体で美女に懐いている。

「こらっ、ずぶ濡れのままで……」

思わず、子どもを叱りつけるような口調になってしまう。

「いえ、いいんです」

「すみません……」

父親になるとこんな感じなのだろうか、最早、相手が絶世の美女であろうとなかろうと、とりあえず申し訳ない気持ちでいっぱいである。私の監督不行き届きでした。以後はしっかり気をつけますので……

知らぬ間に雨は完全に上がって、少しずつ雲の切れ目から日差しが差し込んできている。さすれど、俺の心中は穏やかではない。拾ってきた猫とはいえ、しつけはきちり行いたい。人様に迷惑をかけるのは我慢ならない。

「うちの猫たちがすみません、もしよかったら家でお茶でも？」

「でも……、いいのかしら？」

よく見ると、俺と同年代か少し上の人で四十には到達していないだろう。落ち着いた雰囲気がある大人の女を演出している。

「構いませんよ。どうやら猫はあなたを気に入ったようです。」

「猫は俺の家族ですから、猫の好きな人間は大切なお客様です。」

営業で養われたとはいわれたくないが、自分の持つ最大の笑顔で接した。

「まあ……」

彼女は少し恥ずかしそうに顔を背けると、ふふっと笑った。

「じゃあ、せっかくだし寄らせていただくわ……」

彼女の言動は語尾に独特の間がある。その間がなんとも妖しく感じられて胸は自然と高鳴った。恋とかそんな甘酸っぱいものではないけれど、大人の女と接するとはこういうものなのだと教えられた。いずれにせよ、俺はダンボールに捨てられた猫に、美女とお茶をする絶好の機会をもらったというわけで、こいつらに借りができたわけだ。いずれ、何かお返しをしてやるか、と猫にとりあえずの感謝をしながら、自宅へと向かうのである。

「すみません、まだお名前伺っていませんでしたね？」

ドリップしたコーヒーをカップに注ぎながら、彼女に尋ねる。

「私は、天野聖子と申します……、ところで、あなたの方は？」

「あ、すみません。川野、川野隆康です……」

名前を尋ねるときはまず自分から、最低限のマナーを忘れてしまい赤面する。

「隆康くん、さっきから謝ってばかりね。」

唇に手の甲を当てて彼女がクスッと笑う。主導権は完全に彼女が握っている。知らぬ間に下の名前で呼ばれているが、こっちはずっと天野さんと呼んでいる。だが、心の距離は確実に縮まっていて、コーヒーと洋菓子を舌鼓を打ちながら、互いのプロフィールとか、今の仕事は何なのかを話していった。

天野さんの話は抽象的だが非常に魅力的だった。

年は？ あなたよりちょっと上かな……。

お仕事は？ たぶん人に夢を与える仕事……？

好きなキャラクターは？ ペコちゃんかな……。

夢ってありますか？ もちろん……。

それって一体どんな？ 女の子なら誰でも願う夢よ……。

一つも核心を突いた返答がなく、ぼんやりとしている。でもなぜか、俺の心に染み入るものがある。きっと天野さんの寛容な人間性が母のように姉のように家族的な雰囲気をかもし出しているのだろう。

そんなこんなしているうちに、各家庭が夕食の準備にとりかかる頃合いになった。

「あ、そろそろ夕食を作らないと」

「私も手伝うわよ……」

「いえ、そんな、結構ですよ……。ゆっくりしててください。」

ほんの数時間の間にポジションは完全に決定したらしい。俺は天野さんに対して、丁寧な敬語を使うようになっていた。これは、相手が怖くて無理やり使っているのではなく、俺が使いたいから使っているのだ。天野さんという人間は、今まで出会ってきたどんな人間よりも崇高なオーラが出ている。正直、本気で好きになってもおかしくはない。ただ、今の自分には勿体ない。そんな気持ちになるのである。

「隆康くん、実は料理できないでしょ……」

「な、なんで、わかるんですか？」

「なんでって……、誰でもわかるわよ、このキッチンを見れば」

河野家のキッチンは手入れが行き届いていない。料理ができる人は水周りを清潔に保つのが普通である。実のところ、俺は料理があまり好きではない。今日コンソメスープを作る気でいたのは一種の衝動に駆られただけなのだ。

「ここはお姉さんに任せて……」

「じゃあ、お言葉に甘えさせていただきます」

俺がエプロンを着けたところで足手まといになるだけだ。ここは完全に任せてしまうのが一番いい、考えるまでもなく判断できる。なんとも悲しいことだが、両親も数年前に他界し、恋人も高校以来おらず、一人暮らしが長く続いてきた俺には、天野さんの心遣いは、涙が出るくらいう

れしい。

「底に座ってなさい……」

「はい、わかりました」

こんなやりとりをしていると、天野さんが昔からの家族のように思えてくる。天野さんは俺の買ってきた材料を取り出して、料理を始めた。俺はというと一人ではスペースを持って余してしまうようなソファに腰を据えてテレビの電源を入れた。

――突然発生し、関東地方に局地的な大雨をもたらした雨雲は太平洋側に抜け、現在は晴れ間が除いています。この分ですと、明日の七夕には満天の星空を見ることができそうです。七夕といえますと短冊ですが、……。

4月入社の人アナウンサーが天気予報を伝えている。気付かなかったが明日は七夕のようだ。そういえば、今日行ったスーパーの中にも小さな笹と短冊のコーナーがあった。

「天野さん、明日は七夕だそうですね、知っていました？」

「あ、ええ……」

何気なく聞いた質問が、天野さんの顔を初めて曇らせてしまった。その表情はどこか切なげで、以前、恋人と何かいさかいがあったのではないかと思わせるのには十分だった。まさか、天野さんのタブーが「七夕」だなんて思いもよらず、足元をすくわれた感じがする。俺はそれ以上深入りせず、料理が出来上がるまで黙ってテレビに集中することにした。天野さんも特に気にすることなく、黙々と料理を続けた。

「はい、できたわよ…」

目の前には高級料亭で目にするような和懐石が広がっている。

「天野さん、これ家にある材料で作ったんですか？」

「ええ、いい魚が冷凍庫にたっぷり残ってたものだから…」

「魚は嫌い？」

「い、いえ、魚料理は面倒だから、つい……」

天野さんは、ふふっと、何回目かのスマイルを俺に見せた。

「あ、コンソメスープもあるじゃないですか」

「懐石にはあわないと思ったんだけど、あなたの希望でしょ…」

「あ、ありがとうございます」

やっぱり、この人には勝てない。何か抜かりがなく、俺のかゆいところに常に手が届く。完璧とは天野さんのことを指すのだろう。

「さ、早く食べて、鮮度が落ちちゃうから…」

「は、はいっ、いただきますっ」

「猫ちゃんも、しっかり食べるのよ……」

ジュライとコンソメと俺は、腹がいっぱいになるまで最高のディナーを食した。腹が満たされても、幸福感はそのときだけのものだという。しかし、今日、いただいた料理の余韻は、なんだか、明日、明後日へと続いていくような気がした。

食後は、再びティータイムに興じた。俺は、時間の経つのを忘れて天野さんとの会話を楽しんだ。

いつまでもこの会話が続けばいいのに、と思うがそうもいかない。だんだん話題が途切れてきて、沈黙が訪れるようになった。何度目かの沈黙のとき、ふと置時計が視界に入ってきた。

——23時55分。

自然と思い出したくない、天野さんの切なげな表情が蘇えってくる。あと5分で、天野さんにとってのブラックデーがやってくる。俺の胸に一秒一秒がチクリと棘のように刺さってくる。

——「そろそろ、おいとましなきゃ……」

急用を思い出したかのように天野さんが立ち上がろうとする。

「天野さんっ」

腹の底から声が出た。ピンと空気が張り詰める。

「天野さん、一体あなたに何があったんだ——」

「明日は、皆の目が希望に輝く日なのに、あなたはそんな切なげな顔をする。あなたは、初めて会った俺にでさえ、こんなに優しくすることができる人だ。それなのに何故、そんなに苦しんでいるんですかっ」

俺は彼女への同情からくる悲しさと、何も解決できない自分への苛立ちから声を荒げた。しかし、天野さんは答えてくれない。ミロのヴィーナスのように固まったまま動かない。

「天野さん、俺はあなたが好きです——。恋人でも、家族でも、友人でもないあなた。偶然雨の中の隣人になったあなたのことが好きになりました。そんな俺の好きな人が、目の前で苦しんでいる姿を、このまま放っておくわけにはいきませんっ。」

天野さんがいなくなってしまうと思った瞬間、心でくすぶる気持ちをどうにかして伝えなければならない、と心の中で蒸気機関が煙を上げて作動した。恋じゃなく、一人の人間として好きだという肝心な部分を伝え忘れたが、この際どうでもよかった。天野さんを救うことができれば……。

俺は興奮して肩で何度か息をした。すると、天野さんは体を俺の方に向け真剣な面持ちになった。

「隆康くん、私ひとつ隠していることがあるの…」

わずかな空白の時間で心の準備をする。

「隆康くん、ちょっとの間、目を閉じてくれる……？」

何も言わず、俺は目を閉じた。そして、ひたすら天野さんを信じて、まぶたの裏の世界を眺めた。チクタク、チクタク、置時計の秒針が敏感になった聴覚を刺激し、一秒一秒が活火山の噴火までのカウントダウンのように、緊張感を伴いながら過ぎ行き、さっきまでの楽しい時間が、TVコマーシャルのように繰り返して脳内を駆け回る。

天野さんは、楽しそうだ——。

傘を差し出してくれた天野さん、ジュライを撫でる天野さん、コンソメとじゃれあう天野さん、料理を慣れた手つきで作る天野さん、優しい笑顔の天野さん、崇高なオーラの天野さん、白い光を放つ天野さん、閃光の中に消え行く天野さん、天野さん、天野さん……。

俺の意識は白い光に包まれながら薄れ行き、どこからともなく睡魔がやってきて、思考回路が停止していく。ふわっと体中の力が抜けて、その場にへたり込み、ついに記憶は時の波に飲まれた。

部屋のカーテンが揺れている。窓が少しだけ開いていて、そこから風が吹き込んでいるようだ。カーテンの向こう側から、向日葵になりたくなるような明るい日差しが差し込み、夜を越えて朝が来たことを告げている。

多彩な機能を持つ置時計は、時刻だけでなく日付や気温、湿度までも表示している。

――7月7日 AM7:00 25℃ 30%

比較的過ごしやすい気候条件で、天気的神様に注文をつける必要はない。会社にも余裕で間に合う。しかしながら、俺の気分は優れず、十分寝たはずの体は、とてつもなく疲弊している。

「――ありがとう」

とだけ書かれた紙がテーブルに残され、天野さんの姿はもうどこにもない。

昨日、俺はありのままの感情をぶつけてしまった。しかも、善意とは見せかけの、最大級の怒りを交えて……。

後悔と懺悔が入り混じった苦いものを、下唇と前歯で必死にかみ締め、あふれ出そうな涙をこらえた。

ありがとう……、あなたは一体誰に感謝しているのだ。

俺に向けてその言葉を発したのか。

ならば、それは間違っている。

俺はあなたを傷つけた。身勝手な善意を押し付けてしまった。

あなたの触れられたくない部分に触れてしまった……。

ありがとう……、これは俺のセリフだ。

俺にありがとうと言われる資格はない……。

目覚めてからずっと考えている。なぜ、天野さんが俺に「ありがとう」という言葉を残したのか……。

俺は自分でも気付かない深いところで、天野さんを救ったのだろうか……。

彼女が残した「ありがとう」という言葉を反芻しながら、魔法のように唱えてみる。すると、なぜか悶々とした心がスウッと爽快になっていく。尖った気持ちが丸くなって、ホクホクした焼き芋のような温もりが宿る。

朝食にと、火にかけておいたコンソメスープが適温になった頃、天野さんに対する疑念は遙か彼方に消えてしまっていた。

それにしても、白い光に包まれて消えるなんて、最後の最後まで格好いい。天野さんは、やはり俺にとって憧れで、雲の上の存在であることは揺るぎない。

夜になって、もう長年の間無縁だったけれど、せっかくの七夕だし近くの店で笹を買ってきて窓に飾ってみた。そして、折り紙を短冊にして、油性のマジックで「ありがとう」と書いてくり付けた。

そうすれば、きっと天野さんにも届く気がして……。

